

全体討議 「古典とは何か」

古典学の役割について

全体討議「古典とは何か」の冒頭発言から

興膳 宏

京都大学大学院文学研究科名誉教授 中国分野責任者

古典学あるいは古典研究の役割は、大別して次の二点に帰するであろう。

その一は、それぞれの地域が生み出した多様な古典を、それが生まれた時間・空間の中に正しく位置づけて、その本来の意味を正確に検討し、考察することである。ギリシア・ラテン、イスラエル、インド、イスラム、中国、日本といった世界の各文明圏において、数千年の長い時間にわたり堆積されてきた典籍は莫大な量に上り、その内容はきわめて多岐にわたる。それらのうちのいかなるものを「古典」(classics)として認識するかは、それぞれの地域の歴史的・社会的条件によって自ずと決せられるところであり、一概には論じられない。しかし、共通するのは、いずれの地域の古典を対象とするにせよ、ある一つのテキストを研究するためには、これまでに達成された文献学上の成果はいうまでもなく、考古学・歴史学などの関連諸学の成果にも依拠しつつ、当のテキストをそれが生成されたもとの環境に還元しながら、その本来の意味を探索するという方法論であろう。これは、いわばミクロ的な視点に立つ古典学の方法であると同時に、古典学そのものを学問として成り立たせるための本来的な基盤であるともいえよう。

古典学の役割のその二は、古典の叢智を通して、今日の人間の抱えるさまざまな問題を照射し、我々がよりよい未来を生きるための糧とすることである。長い時間を生きぬいてきた古典には、一地域や一族を超えた人類共通の知恵ともいべきものが蓄積されているはずである。それらを古典学者だけの財産とせず、より普遍的な人間の知的共有財産として活用することは、変化の激しい今日の時点でこそ、より大きな意義を有するといってもよいであろう。現在の世界には、南北問題、民族問題、環境問題などの複雑で解決困難な多くの難題が存在する

が、それらへの対応を模索するに当たって、現代に生きる人間の知恵だけでなく、厚い古典の叢智の蓄積に鑑みることが、人類の未来に豊かな可能性を開拓する道に通じるであろう。これは、マクロ的な視野の中での、古典学の新しい目標であり、また意義でもある。

こうした二つの役割のうち、第一の役割は、古典学の研究者にとってはむしろ自明のことであり、何をいまさらと思う向きも少なくないかも知れない。ただ、私があえてこの点に触れたのは、古典学者の間ではこの役割が一種の自己目的化して、より広い視野の中で自分の研究のあり方が点検される機会が少なかったのではないかと、という反省からである。テキストがあるから、とにかくそれに取り組むというのでは、古典学者としての責任を十全に果たしたとはいえないのではないかと。それに、近年に著しい専門分野の細分化は、いっそう自分の研究の全体的な位置づけに対する研究者の自覚を鈍くしてはいないだろうか。研究者自身の専門領域での達成を、いかにして普遍的な人間の達成として共有できるか、その道を真剣に検討すべき時期にきているように思う。

また第二の役割については、その重要性をよくよく認めながらも、それが必要かつ十分な基礎研究の裏づけなしに先走ることを恐れる。たとえば、古典研究が科学性を抜きにして安易にナショナリズムの風潮と結びつく結末は、戦前のわが国の苦い経験を通してよく知られているところであろう。根気を要する基礎研究を飛びこえて性急に大きな結論を求めようとする傾向は、私のたずさわる中国古典の研究に関していっても、今や中国の学界まで含めて、広く弥漫しているような印象を受ける。変転まことに目まぐるしい現代の社会では、とかく気長な基礎作業は敬遠されがちだが、一見したところ華々しい成果も、根づくところが浅ければ、その生命も長いものではありえまい。自然科学の達成は、一つのエッセンスに凝縮されて後世に伝えられる。人文科学の一分野としての古典学は、いかにしてその智の精髓を未来に伝達すべきか。この課題に、古典学者はもっと真摯であらねばなるまい。

古典学の果たすべきこれら二つの役割が、あくまでも相即的で円満な関係を保ちつつ推進されてゆくととき、我々の「古典学の再構築」もはじめてその目的を全うすることができるだろう。